

公開講演会記録

東京大空襲を語り継ぐ

—東京大空襲と私の体験

東京大空襲を忘れない実行委員会代表 濱田嘉一



はじめに

1945年3月9～10日に東京下町（現・江東区、墨田区、台東区、中央区）を中心に、米B29爆撃機の空襲で、被災者100万人、死者10万人の被害を被って今年で80年。あの、焼夷弾の降る炎の中を逃げまどい、一命を得た小学校1年だった私も88歳、二度とあの悲劇を繰り返さないよう、あの夜の経験を語り継がなければと、常日頃から感じていた。

昨年、中小企業関係の研究会に参加

した折、御会の井出亜夫会長から、依頼があり、お話しする機会をいただいた。2025年6月5日、国際善隣会館会議室で行ったその内容をまとめたので、報告させていただく。まず私の今日までの歩みを紹介する。

（1）幼・少年期 1937年東京都深川北（現・江東区）に生まれる。生後6か月にして父（美佐夫）召集、39年8月ノモンハンにて戦死。44年深川区立明治国民学校入学。45年3月東京大空襲被災、焼け残りの福住町で、焼け跡の永代で少年期を過ごす。

（2）学ぶ 53年深川区立深川第二中学校卒業。53年東京都立両国高等学校定時制入学、「生き方」を学び57年卒。58年中央大学第二学部入学、「糧の得方」を学び62年卒。

（3）働く 53年東京都中央税務事務所（臨時職員）、56年ジェトロ、62年（資）三島商店に勤務。同年（財）日本中小企業指導センター（現・中小企業基盤整備機構）に就職、97年60歳まで勤務。以降97年～2017年80歳まで、諸中小企業関係法人などに勤務。2017年一般社団法人先端技術産業

戦略推進機構 清算人に。

(4) 現在 2016年妻ががんで旅立って以降、終活として「東京大空襲を忘れない “平和の集い”」などの実行委員会を主宰し、地域の平和運動などに携わる。

東京大空襲とは

先の大戦末期(1945年)米国の空・海・陸軍は、日本各地で、住民殺戮を行った。その規模の大ききから、東京大空襲(3月10日、焼夷弾爆撃、死者10万人以上)、沖縄戦(3月26日～6月23日、艦砲射撃・上陸戦闘、死者20万人以上)、広島空襲(8月6日、原子爆弾投下、死者約16万人)、長崎空襲(8月9日、原爆投下、死者約7万4000人)は、米軍による四大住民虐殺(ホロコースト)と言われている。その手始めが、東京大空襲だった。

東京の空襲

大空襲を含め、東京は1944年11月24日から1945年8月15日の間に106回の空襲を受け、その総てを東京空襲(広義)という場合もあるが、その中でも、被災者100万人、死者10万人以上の被害があった1945年3月10日の下町空襲を「東京大空襲」という場合が多い。

なお、4月13日城北空襲(死者約2500人、焼失家屋約17万戸)、4月15、16日城南空襲(死者4800人、焼失家屋22万戸)、5月24、25日山の手、多摩空襲(死者約3600人、焼失家屋16万戸)を、それぞれ「大」を付している場合がある。当時警視庁が発表した東京全体の被害は、被災者310万人、死者11万5000人以上、負傷者15万人以上となっている。

空襲の経過

東京が受けた最初の空爆は、1942年4月18日米海軍航空母艦の艦載機によるもので、早稲田周辺が被害にあった。その空爆で、早稲田中学の生徒さ

ん1名を含む約50名の方が亡くなっている。なお、この空爆は1941年12月8日の日本海軍による真珠湾攻撃の仕返しとされており、米海軍が42年6月5日のミッドウェー海戦による勝利で、海洋権を握ったと言われる以前、既に日本海軍の防衛線は、破られていた事実をも物語っている。

この空襲から2年半後の1944年11月24日に本格的空襲が始まるまでの間、東京への空襲はまったくなかった。私の記憶では、この2年半の間、夕方7時にラジオから流れる軍艦マーチの音楽にのせた、日本海軍の戦勝報告「本日、日本連合艦隊は、米海軍戦艦〇〇隻を撃沈せり」との放送に、よもや日本海軍が壊滅状態であり、米軍が国土の鼻先まで進軍していることなど、夢にも思わなかった。戦後明らかにされた、この2年半の間、米軍が用意した日本本土空爆作戦の経過を見てみよう。それは、爆撃機(B29)と投下する爆弾(焼夷弾)の開発および飛行場の確保だった。

(1) 爆撃機B29の開発と生産 飛行

高度1万^{フィート}を従来より飛行速度毎時100^{マイル}速い最高速度毎時575^{マイル}、航続飛行距離5000^{マイル}、搭載量2^トの能力を有する戦闘爆撃機で東京サイパン間の距離(2450^{マイル})の往復飛行を可能とし、また速度も日本が誇る零戦を毎時10^{マイル}上回り、1万^{フィート}以上の高度を飛ぶB29に対抗できた高射砲は、43年に約140門が生産されたが、そのほとんどは44年の初期の空襲で破壊されていた。

(2) 焼夷弾の開発 アリゾナの砂漠

地帯に日本の模擬家屋〈長屋〉をつくり、どのような爆薬で、どのように壊滅させるかの実験を繰り返し、焼夷弾を開発した。その正体は、ゼリー状のナフサ(ガソリンに似た石油製品「ナーム」)に浸したウエスを長さ約50^{センチ}、経8^{センチ}ほどの筒状の鉄製容器に詰め、これを36本束ね(クラスター)、投下後、空中で散弾のように分散させ広範囲に落下させる。「点」的攻撃から「面」的攻撃へと変化させた攻撃は、

1投下で36か所への攻撃を可能とした。

(3) 投下された焼夷弾 家屋を直撃、

大火災を呼び、道路に撒かれた焼夷弾は、火を噴きながら転がり、ナフサに浸されたウエスを四方にまき散らし、人々を焼き尽くした。

東京大空襲の実態

米軍側の作戦とその実態を見てみよう。

(1) 目標は下町に点在する軍事工場

その工場は人々が最も多く居住する下町の民家の間に点在する。このため、民家もろとも壊滅させることを目標に作戦が立てられ、爆撃が行われた。この作戦とその実行については、戦後、戦争犯罪として裁かれなければならないとする意見もある。

(2) 3月9～10日 延焼効果の高い

西北の強風に見舞われる関東の気候条件を統計的に把握しており、この夜が

選ばれ、空襲が行われた。

(3) 投入された325機のB29 自

衛武装装置(機関砲や弾薬)を撤去し、1機当たり通常の3倍6^トの焼夷弾を搭載し、全体では、1783^ト、38万1300発もの焼夷弾が1600～2200^{フィート}の超低空から投下された。

(4) エレクトロ照明弾 先行する編

隊が投下、その閃光に囲まれた攻撃区域を後続する編隊が、集中的に焼夷弾を投下、着弾精度の高い爆撃が計画され、実行された。この攻撃を、全体的にみると、下町の一定地域をドーナツ状に爆撃し、巨大な炎のリングとなつて退路を断たれ、中心に集まらざるを得なかった人々に雨の如く焼夷弾が降り注がれ、多くの人々が焼き殺された(12時～14時半の間に10万人以上の人々が殺された)。

被爆地の実態

3月9～10日の深夜に焼夷弾爆撃さ

れた、当時下町と言われた地域は、現在江東区、墨田区、台東区、中央区のほとんどで、周辺の江戸川区、荒川区、千代田区、文京区、港区なども類焼被害を受けているが、ここでは、直接爆撃された下町現4区の実態を見てみよう。

(1) 消防活動を強制した防空法など何の役にも立たず、強い北西の風にあおられ想像を絶する大火災となった。至るところで巨大な火災旋風となり、主な通りは「火の粉の川」となり、逃げ場を失った人々に焼夷弾が注がれ、人々が生きながらにして焼き殺された。

(2) コンクリート 燃えないはずと信じて、コンクリート作りの学校や官公庁などへ避難した人々もいたが、その約70%が焼け落ち、運命をともしってしまった。あるいは建物は焼け残ったが、その建物の中に入らず、扉の外で多くの人々が焼かれた。

(3) 深川の縦横に走っている運河

焼夷弾のガソリンが川面に流れ、運河も火の川と化し、熱さに耐えられず、水を求め、川に飛び込んだ人々をも焼き殺した。10日の朝、生き残った消防団員が鳶口で川から、死体を収容する作業が、あちこちの川岸で見られた。それでも、川面一面の死体の下を川が流れていた堀割りがあったと伝えられている(村岡信明『赤い涙』)。

(4) B29の爆音が消えると同時 陸軍がトラックで死体の収容を開始、主な道路、建物内の死者を猿江恩賜公園、錦糸公園(江東区)、墨田公園(墨田区)、上野恩賜公園(台東区)などの空き地に仮埋葬した。

ただし、河川での死者の多くは、流されたままで、今でも東京湾の水底、あるいはビッグサイトなどの埋立地の下に眠っている。私が小5の夏、東京湾の「夢の島(駐留軍の保養地)」へ学校行事で、潮干狩りに行った。友が蛤と間違え、頭蓋骨を水から上げたことを覚えている。

私の体験

母が平野町2丁目の町会事務所を任されていた関係で、その2階ヘトラックガレージの階上」が住まいで、小さな庭が南側にあった。その庭に3月9日の23時55分(わが家の時計)、焼夷弾が着弾、火が噴いた。

(1) 私の東京大空襲はここから始まった
母がバケツで水をかけていたが、消えるはずがない。階下の町会事務所に詰めていた消防団員からの「濱田さん、もうダメだ、逃げなさい!」という叫びに促され、母は、バケツに住民台帳を詰め、私は父の写真などを小さなリュックに入れ、母と当日わが家に泊っていた祖母(母の母)、従姉妹二人の5人で、家を飛び出し、まだ、爆撃されていない西方600㍎ほどの清澄庭園の黒々とした森を目指した。

(2) 300㍎も行かないうちに 爆音とともに焼夷弾が雨のように降って

きた。幸いなことに眼の前に浄心寺の防空壕が口をあけていた。5人揃って中に入れてもらえたが、最後に飛び込んだ私の後ろに焼夷弾が転がりこんできた。けれども強い西風にあおられて火は、今飛び込んだ東の口（外）に向かって噴出していった。慌てて西の出口から這い出し、道路に出たが、従姉妹二人の姿がない。母が叫んだ「清澄庭園に逃げるんだよ！ 清澄庭園だよ！」と。

（3）清澄庭園までは300メートルほど

60歳の祖母も懸命に走った。幅40メートルの清州橋通りを渡り、庭園の塀までたどり着いたが、高さ2メートルのコンクリート塀は、どうにもならない。母が汲み取りさんが入る90センチほどの通路を見つけ、3人はもぐり込んだ。と、同時に爆音、見上げると空一面にゆらゆら揺れる火のお札のような焼夷弾が再び降った。シュル・シュル・シュル、ターン・ターン。焼夷弾の風を切る音、コンクリートの地面に当たる音。そして人々の絶叫、火を浴びて、燃えながら走る人、背中が燃え踊り狂う人、幼少時に見た菩提寺「深川ゑんま

堂」の地獄絵そのものが目の前に展開されている。祖母が耳元でささやく。「ヨシカズ、次はお前の番だよ。お題目を上げなさい」。三人で唱える「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」……。

（4）隣家の主人「ここも危ないから、私どもも庭園内に入ります。先に入って下さい」と、梯子を掛けて下さった。

庭園内に入り、池の端に座る。空は真赤に染まり、ひっきりなしに火の粉が降る。住民台帳を入れたバケツが役に立つ、台帳を僕に預け、母は膝まで、水につき、そのバケツで私たちが付近に座っている人にも水をかける。熱い！ 北西の空が一段と明るくなり、火の粉が大量に舞う、母が叫ぶ「学校が燃える！」（清澄庭園入り口の前に建つ深川家政高等女学校が母の母校）。中村高等女学校とともに焼け落ちる。火の粉が天をつく、この瞬間を目の当たりにした。

（5）爆音が止み火の粉も次第に収束

濡れたはずの上着が乾いていたほどの熱さだった。突然母が叫ぶ「美代子、

康枝」と。浄心寺の防空壕を出た折、迷子にしてしまった姪たちの名を呼んだ。自身の無事の確認と同時に、無事でいてほしいとの思いが込み上げてきた様子で、池の対岸にちらりと見える「赤い布団」を被った二人連れを見つめて、「生きていてくれよ美代子」とつぶやいていたことを覚えている。

（6）真っ赤な太陽 東の空に昇ってきた。煙による涙目は、太陽が泣いているようにも見えた。

（7）清澄庭園 避難施設ではない避難場所といわれていた。「明治国民学校」が、焼けていないので避難するようになると言われ、毎日通っている学校に向かった。出口で、母から「道に焼けぼっくりがあったら、絶対に踏まないように」と注意された。関東大震災を経験した母ならではの、一言であった。

焼死体は、既に軍によりトラックで運ばれた後で、ただ、灰塵と化した家々の痕跡（焼け跡）が清州橋通りを挟んで続いていた。

(8) 明治国民学校の校庭 テントで囲まれた黒い塊が山のように積まれていた。数時間前、ここで展開された悲惨なホロコーストの犠牲者たちであった(その実態は後掲)。

(9) 明治国民学校の講堂 早めに避難した人々と清澄庭園から誘導されてきた人々でごった返していた。その中には、はぐれた従姉妹二人とその母(母の兄嫁)と娘一人の4人がいた。母は安堵感で、その場に座り込んでしまったことを覚えている。はぐれた従姉妹は、浄心寺の防空壕を出たところで人の波に飲まれ、押し流されていたが、母の「清澄庭園」という声が聞こえたので、何が何でも清澄庭園を目指し、裏門から入園したとのこと。その途中、女の子二人では危険だから、と赤い掛け布団を掛けてくれた親切な人がいて、それを被って逃げ込んだとのこと。母が対岸から見た赤い掛け布団の主は、従姉妹たちだった。ただ、兄嫁と一緒のはずの母の父(祖父)と母の兄(伯父)の姿がない。焼夷弾が自宅に落ち

たとき、バラバラに逃げたので、その行方はわからないという(伯父の死体は3日後に八幡宮の裏の「油堀川」で母が見つけ、兄嫁と二人で、浄心寺の境内で荼毘に付し、菩提寺に納骨した。祖父は、いまだに見つかっていない)。

(10) 講堂 次々と避難する被災者で溢れ、立っている隙間もない。駐屯している軍隊から、「福住町、佐賀町は燃えていない。縁故のある者は、即時退去せよ」とのお触れが出され、父の実家(父は1939年に戦死、祖母と叔母、その娘の従姉妹が住む)のある福住町に向かう。

(11) 途中の黒亀橋 橋上に、焼けただれた消防車が1台放置され、その後方に消防士と思われる6体の焼死体が積まれていた。まだ川面には数体の遺体が流されており、空襲直後の様子と変わらない情景が忘れられない。

(12) 永代の母の実家 蔵が焼夷弾の直撃を受け、母屋にいた家族は外へ逃

げた。叔母と娘は、明治国民学校に向かい、伯父は、恐らく、祖母と娘二人がいる平野町のわが家を目指したのではないかと思われる(「油堀川」の川沿いから、平野町は近い)。祖父は代々の家から離れず、家の脇で倒れていた。死体は軍のトラックに積まれたという証言があった。

(13) 福住町の父の実家 母方の実家から100mとは離れていないが、爆撃を免れた。父方の祖母と叔母・娘(従姉妹)3人と無事を喜びあった。焼夷弾爆撃を免れたのだから、恐らく、そのまま家においても無事だったと思われるが、周囲は火の海、逃げずにはいられなかったという。暗い方へ、暗い方へと逃げ、永代橋のたもと公園で身を寄せ合っていた(家は焼け残ったが、一家全滅という家族もあった)。

(14) 母は町会事務所を任せられる 焼け跡の孤島のような福住町で、8月15日までその任に当たり、出入りの激しい住民の移動、その登録や少ない配

給ものの手配など、酷悪な生活環境の中で、何とか頑張っていた。

戦後処理

大空襲の後始末は、10万体に及ぶ遺体の埋葬が行われたものの、沖縄、広島、長崎のように国を挙げての慰霊事業や祈念館の設置はなく、保障や戦争犯罪に至っては、この80年間まったく顧みられていない状況が続いている。



ここまで逃げた親子の姿

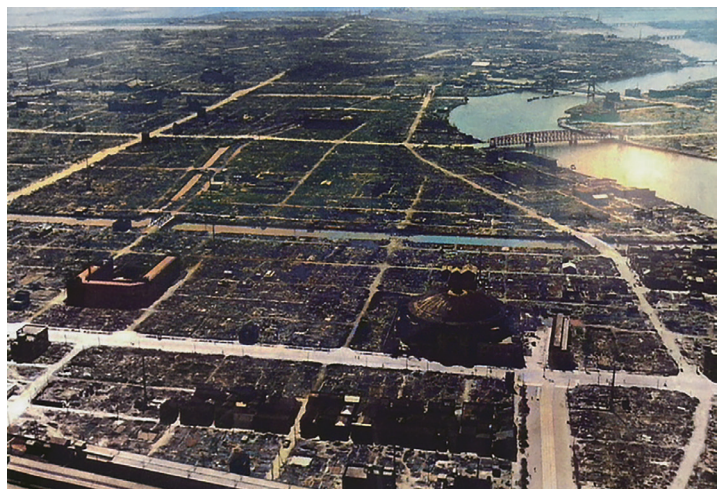
(1) 埋葬 猿江恩賜公園、東陽町交差点北東角（江東区）、錦糸公園、墨田公園（墨田区）、上野恩賜公園（台東区）などの公的空き地に仮埋葬されていた約10万体の遺体は、東京都の失業対策事業（「注」参照）として1948年掘り起こしが始まり、3年間かけて、洗浄し、火葬などの処理が施され、震災記念堂（墨田区）に安置された。1951年、同堂は名称を東京都慰霊堂に変更されている。なお、この



集められた焼死体

とき確認された頭蓋骨の数8万1147をもって、東京大空襲死者と公的には言われている場合が多い（この他に共同墓地に埋葬されなかった遺体、川に流され東京湾の水底に眠っている遺体を勘案すれば、優に10万體は超えている）。

注：1日の賃金254円、「ニコヨン」と呼ばれた日雇い労働者で、この任に就いた人たちは主として戦地からの引き上げ日本兵で戦地での経



どこまでも続く焼け野原

験を生かし遺骨処理に当たったと言われている（中国、東南アジアなどから100万人を超える復員兵の対策事業で、まだ復興されない国内産業では、雇用の機会がほとんどなかった）。

（2）慰霊 沖縄、広島、長崎の犠牲者に対する慰霊は、国家的規模で行われているが、東京大空襲犠牲者の慰霊は、東京都が「慰霊の日」と定めたことに止まり、その記録を残す資料館も、民間有志が資金を拠出して設立された「東京大空襲・戦災資料センター」が江東区に存在するのみ。一日も早く公的な「東京都平和祈念館」が建設されることを願わずにはいられない。現在、筆者は「東京都平和祈念館（仮称）建設をすすめる会」への協力、「東京都平和祈念館（仮称）建設の具体化を求める緊急アピールへの賛同署名の呼びかけ人」として活動している。

（3）保障 2007年3月9日「東京空襲犠牲者遺族会」の被災者、

犠牲者の遺族112人は、日本政府に対し、謝罪および総額12億3200万円の損害賠償を求めて、東京地方裁判所に集団提訴を行ったが、2013年5月9日最高裁は原告側の上告を破棄、全面敗訴が確定した。しかし、この間2011年に超党派議員連盟「空襲被害者等援護法を実現する議員連盟」が設立され、2016年4月初めて「救済法案の素案」が作られたが、未だに法案には至っていない。国会内では、超党派議員連盟「空襲議連」が、全国的には「全国空襲被害者連絡協議会」が精力的に活動を続けている。

（4）戦争犯罪 東京大空襲は、第1次世界大戦後の1922年、ハーグ空軍規則で禁止されていた、軍事目標以外の民間人の殺傷を目的とした空襲であって、決して許されない戦争犯罪であるとの見解は無視され、2007年の東京大空襲訴訟（前掲）でも戦争犯罪が問われたが、日本の司法当局は取り上げなかった。また2013年5月に第2次安倍内閣は、東京大空襲につ

いて「国際法の根底にある基本思想である人道主義には合致しない」とする一方「当時の国際法に違反して行われたとは言い切れない」との答弁書を閣議決定し、米国への直接的な批判は事実上避けている。

なお、大空襲の無差別爆撃を指揮したカーチス・ルメイ空軍司令は「朝鮮戦争」「ベトナム戦争」の米空軍を指揮し、キューバ危機では、キューバのミサイル基地への爆撃を呼びかけ、ベトナム戦争でも、持続的な北ベトナム爆撃キャンペーンを行っている。このルメイ指令官に第1次佐藤内閣は、1964年12月「日本の航空自衛隊育成の功」を理由に勲一等旭日大綬章を入間基地で授与している。

講演は、ここで終了したが、「焼け残った街の記憶」を加えさせていた。大空襲の焼跡に残された陰の部分とご理解いただきたい。

焼け残った街での記憶

ウェブサイトで、東京大空襲で焼け

残った街を調べると、向島区（現・墨田区）京島が表示されているが、私が戦後を生きた深川区（現・江東区）の福住町、佐賀町の表示は見当たらない。空襲後の終戦前後、あんなに活気があって、活き活きとした焼け残りの街が、現在では人々から忘れられてしまっている。そんな思いから、追加させてもらった。現状は、双方の街を合わせても人口5000人程度であるが、大空襲後の焼け残りの町では、恐らく1万人以上の人々が、8月15日までは再度の空襲を恐れながら、8月15日以降は、食べることに事欠きながら、必至で生き抜いた記憶だ。

（1）住宅難と食糧難 避難した父の実家は借家であったため、すぐに追い出され（大屋宅が焼失・避難）新たな住まいには、母方の家族合わせて10人が6畳一間での借家生活、子どもたちは、押し入れが寝床の状態。

（2）食べ物 福住、佐賀町は、倉庫に囲まれた運河沿いの街。半焼の倉庫

から失敬した「焼け米」で、何とか食いつないだが、梅雨を迎え、腐敗。配給の少しの米、麦、ときには、ふすま粉や雷魚まで、焼跡の雑草、運河で釣るハゼなど、食べられるものは、何でも口にした。8月15日終戦、町会事務所が閉鎖、失職した母は「ヤミ屋」に転職。新たに迎えた夫を用心棒（？）に、町内の食の確保に東奔西走していた終戦混乱期の母の姿が忘れられない。

（3）明治国民小学校 焼けなかったが休校。空襲時1年生を担当されていた大竹てる先生が、通っていた学校に係なく小学生10人ほどを集め、佐賀町の船会社の2階で、5月から寺子屋方式の授業を開始。教材は、低学年がマンガ「ふくちゃん」「のらくろ」で、高学年が「西遊記」だったと記憶している。

（4）明治小学校 9月1日に開校した。初日の授業はなく翌日から使う教室の掃除だった。裸足でパンツ1枚での清掃、5分程度経ったところで、足から腹、背中が猛烈に痒い。ゴマを蒔いたように、

黒い点々・蚤（シロ）が這い上り、血を吸っていた。軍隊帰りの先生曰く「蚤も腹をすかせているんだ、我慢せい！」と、生徒たちは「俺たちも蚤になりてえ」。

（5）講堂の出入り口のコンクリート床に残る黒い油染みは、あの3月10日に講堂の中に入らず、ここで焼かれた人々の痕跡。月に1度回ってくる掃除当番では、クレンザーに浸したデッキブラシで磨いたが、5年後の卒業まで、その墨痕は消えなかった。

（2025年6月5日・公開討論会）

筆者略歴（はまだ・よしかず）

1937年東京深川（現・江東区）生まれ。53年東京都中央税務事務所（臨時職員）、56年ジェトロ、62年中小企業指導センター（現・中小企業基盤整備機構）に就職。2018年から『赤い涙』頒布を開始、併せて「東京大空襲を忘れない実行委員会」を立ち上げ（代表）。現在、三多摩初の「9条の碑」をつくる会の共同代表も務める。